

令和3年度

第7回大分県教育委員会 議事録

日 時 令和3年7月9日(金)
開会13時35分 閉会14時20分

場 所 教育委員室

令和3年度
第7回大分県教育委員会

【議 事】

(1) 議 案

第1号議案 令和4年度大分県立さくらの杜高等支援学校の入学定員について

(2) 報 告

① 一人一台端末を活用した小・中学生プレゼンコンテストの開催について

② 大分県 STEAM 教育（次世代人材育成）推進事業について

(3) その他

【内 容】

1 出席者

委 員	教育長	岡 本 天津男
	委 員 (教育長職務代理者)	林 浩 昭
	委 員	岩 崎 哲 朗
	委 員	高 橋 幹 雄
	委 員	鈴 木 恵 代
	委 員	岩 武 茂 代
事務局	教育次長	渡 辺 登
	教育次長	久保田 圭 二
	教育次長	米 持 武 彦
	参事監兼特別支援教育課長	友 成 洋
	教育改革・企画課長	重 親 龍 志
	教育デジタル改革室長	神 崎 文 隆
	高校教育課長	三 浦 一 雄
	教育改革・企画課 主幹 (総括)	門 野 秀 一
	教育改革・企画課 主査	末 松 敬 雅

2 傍聴人

2 名

開会・点呼

(岡本教育長)

委員の出席確認をいたします。

本日は、全委員が出席です。

なお、新型コロナウイルス感染防止の観点から、議題ごとに、関係課長のみ入室しますので、よろしくお願いします。

(岡本教育長)

それでは、ただ今から、令和3年度第7回教育委員会会議を開催します。

署名委員指名

(岡本教育長)

本日の議事録の署名については、鈴木委員にお願いします。

会期の決定

(岡本教育長)

本日の会議はお手元の次第のとおりです。会議の終了は14時5分を予定していますので、よろしくお願いします。

議 事

【議 案】

第1号議案 令和4年度大分県立さくらの杜高等支援学校の入学定員について

(2課〔教育改革・企画課、特別支援教育課〕入室)

(岡本教育長)

それでは、第1号議案「令和4年度大分県立さくらの杜高等支援学校の入学定員について」提案しますので、特別支援教育課長から説明をしてください。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

それでは、「令和4年度大分県立さくらの杜高等支援学校の入学定員について」説明します。

資料の1ページ、2ページは議案書で、3ページは別添資料となっております。資料3ページをご覧ください。

令和4年4月に開校する「大分県立さくらの杜高等支援学校」の入学定員(案)についてですが、「1 定員策定の考え方」の(3)に記載のとおり、高等学校標準法(公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律)では、特別支援学校高等部の単一障がいの生徒で編制する場合の1学級の定員は8名を標準とすると定められています。

学級数については、令和3年4月第1回教育委員会会議で議決されたとおり、4学級としていますので、令和4年度の入学定員については32名としたいと考えています。

以上で、説明を終わります。

ご審議のほど、よろしく申し上げます。

(岡本教育長)

ただ今説明のありました議案について、審議を行います。

ご質問・ご意見はありませんか。

(林委員)

定員に対して、実際に応募の見込みはどのように考えられていますか。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

現在32名を超える希望者がいると聞いています。ただし、出願には知的障がいがあるということが前提になるのですが、希望者全員に知的障がいがあるかということに関して、まだ確認ができていません。今後、入学説明会等で具体化していきたいと考えています。

(林委員)

希望者が増えた場合は、入学定員について柔軟な対応ができるのでしょうか。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

他の特別支援学校高等部の定員については、全員が入学できるということを前提に定員の策定を行っています。高等支援学校については、選抜試験ということで不合格者が出るという考え方で定員を策定しています。ただし、入学者選考を12月14日に他の特別支援学校高等部に先駆けて実施して、不合格となっても他の特別支援学校高等部に入学できるように配慮をしています。

(岩武委員)

課長の説明の中で「選抜」という言葉を使われましたが、高等特別支援学校については「入学者選考」と考えられていると思います。「選抜」と「選考」の違いについて、どのように捉えられているのでしょうか。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

当初は「選抜」試験という言葉を使っていましたが、確認をしたところ「選抜」というのは成績順に並べていくという考え方で、「選考」はいろんな条件の中で総合的に判断して選んでいくという考え方でした。そして、「選考」試験であれば不合格者を出さないということではないということでした。今回、資料の中で「入学者選考」という言葉を使用しましたが、実際は不合格者が出るということになります。

(岩武委員)

「選考」試験だから不合格者を出してはいけないということではなく、県立高校については「入学者選抜」としているのに、あえて「選抜」ではなく「選考」というようにしているのは、高等支援学校を受検する生徒に対して、何らかの配慮があるということなのではないでしょうか。入学者を決定するにあたって、県立高校とは違う形で、成績だけでなく総合的に判断して決めるということなのではないでしょうか。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

単に学力検査だけで判断するのではなく、面接等いろいろな側面から総合的に判断していくことになります。

(高橋委員)

高等学校標準法の中で1学級の生徒は8人ということですが、それに対して教職員は何人くらい配置されるのでしょうか。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

教員については1学級2名というのが基本になります。そして、高等学校標準法に照らし合わせて、管理職等を含めて学校に配置される教職員の総数が決まることになります。職業科の学科になりますので、どのような教員を配置したらよいかなどは教育人事課と十分に協議して進めていきたいと思っております。

(高橋委員)

産業技術科ということですが、具体的にどのような科目をどのように教えていくというのは決まっているのでしょうか。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

学校の教育課程については、ほぼ決まっています。現在は、その教育課程の中

で具体的にどのように授業を進めていくかなどの細かい部分を確認しているところです。また、来週開催予定の開校支援委員会の中で有識者の方々に教育課程についてのご意見をいただくようにしております。そのご意見等も踏まえながら、どのような教員を配置したらよいかなどを検討していきたいと考えています。

(岡本教育長)

私も、実際に建築中の校舎を見学しました。洗車を行うようなコースやホテルの清掃作業やランドリー業務を行うコースもありますよね。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

産業技術科で選択できるコースとしては3つ考えています。

1つ目は、クリーンコースでビルや宿泊施設等の清掃、洗車などを行うコースです。2つ目は流通・販売コースで、販売や接客、商品の在庫管理等を行うコースになります。3つ目は調理コースで、調理技術、調理知識、食品衛生管理を行うコースになります。

この3つのコースでカリキュラムを編成しています。

(高橋委員)

できれば、将来、就労支援をする中で地元企業等にうまく結びつけられるように、インターンシップなどにも結びつけやすいような学科を設置してもらえれば、県内の企業も採用しやすいと思いますので、よろしくお願いします。

(岩崎委員)

「次年度以降の入学定員の策定については、『大分県立高等特別支援学校入学者選考実施要項』の策定をもって行う」とありますが、将来的な想定として、希望者が定員を超えても定員の見直しは考えていない、あるいは状況によっては1学級の定員を8人以下にするとか、どのようなことを考えていますか。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

次年度以降については、今回提案している1学級8人で4学級といったところを基本として、「大分県立高等特別支援学校入学者選考実施要項」を策定する際に、あわせて入学定員を策定していくようにしたいと考えています。

(岩崎委員)

将来的に、例えば学級数を増やしたり、あるいは逆に1学級の定員を減らしたりといったことが、場合によってはあり得るということでしょうか。

(友成参事監兼特別支援教育課長)

まず、最初の卒業生が出る3年後の状況として、ニーズが高まり、かつ実績も上げているということであれば、定員等を増やすという議論になることも考えら

れますが、今のところは今回の提案の形で策定していきたいと考えています。

(岡本教育長)

他によろしいですか。

それでは、第1号議案の承認についてお諮りいたします。承認される委員は挙手をお願いします。

(採 決) 全員挙手

(岡本教育長)

第1号議案については、提案のとおり承認します。

【報 告】

① 一人一台端末を活用した小・中学生プレゼンコンテストの開催について

(1課1室〔教育改革・企画課、教育デジタル改革室〕入室)

(岡本教育長)

次に、報告第1号「一人一台端末を活用した小・中学生プレゼンコンテストの開催について」教育デジタル改革室長から説明をしてください。

(神崎教育デジタル改革室長)

それでは、令和3年度1人1台端末を活用したプレゼンテーションコンテストについて、説明します。

これまで過去3回、ICT機器を活用したプレゼンコンテストを開催してまいりました。今年2月に開催した模様を、この後、ご覧いただきたいと思っております。優勝しました玖珠町立くす星翔中学校と中津市立鶴居小学校の発表の様子です。実際は2校で10分程ありますが、冒頭部分のみ2分程度に編集したものです。VTRの始めに少し無音の場面がありますが、そのままご覧ください。

【VTRダイジェスト版(2分30秒)】

いかがでしたでしょうか。学校の授業の中で資料づくりやプレゼン方法を学び、視聴者にわかりやすく主張する姿は、非常に頼もしく感銘を受けたというような感想が多く寄せられております。

今年度は、全ての小・中学校の児童生徒に、1人1台端末を活用できる環境が整備されましたので、より応募しやすく、リニューアルして開催したいと考えております。

資料1ページの実施要項をご覧ください。

「1 目的」にありますように、児童生徒の情報活用能力及び教員のICT活

用指導力の向上を図るとともに、1人1台端末の効果的な活用方法の普及を図ることを目的としています。

資料3ページのチラシをご覧ください。概要を説明します。

応募資格は、県内の小・中・義務教育学校に在籍する児童生徒です。公立・私立は問いません。応募部門は、小学生の部と中学生の部の2部門で、テーマ設定は自由となっています。応募条件として、1人1台端末を使って資料を作成することとしています。また、個人でも出場できるようにしております。

学校の授業で取り組みやすいよう、1チームあたりの人数制限を撤廃し、調査活動や資料作成などは、何人で行ってもよいことにしています。

応募期間も、これまで2ヶ月程度でしたが、来週から11月末まで、4ヶ月以上に延長しました。また、予備審査の提出物も簡略化するなど、より応募しやすくしています。

12月から予備審査を始め、来年2月19日の本選には、小・中学生の各部門6チーム、計12チームが実際にプレゼンテーションを行い、優勝と準優勝を決定します。本選の前には、教育委員の皆さまにも、改めてお知らせしますので、会場またはオンラインで児童生徒の発表をご覧いただくと幸いです。

以上で、説明を終わります。

(岡本教育長)

ご質問・ご意見はありませんか。

(鈴木委員)

先日、子どもが通う小学校で、タブレットの活用方法についての状況を確認しました。題目が決まっており、「調べてプレゼンをしてください」などの指示があると、きちんと調べて発表できるようでしたが、プログラミングで、「自分で好きにやっていたいよ」と言われたら、何もできない様子が見られました。

指示しないとできないというのは、非常に危険だと思っており、1人1台端末を手にしていることが、悪い方に進んでしまうのではないかと思うのです。

そんなに成績は悪くない学年ですが、言われたことは素直にできるけど、自分で発想することはできないということは、危機的な状況だと思います。

取組を積み重ねていけば、自分で組み立てていくことができるようになると思いますが、タブレット端末やICTが授業の中で生かされていないと感じ、非常に危機感を覚えました。先生方は「ここまでやりなさい、こういうことをやりなさい」と指示を出しがちですが、自由にやらせてみることも大事だと思いました。

(高橋委員)

豊後高田市の学校の授業を見させてもらったとき、子どもたちが「iPad」を使ったプレゼンをしていました。今の子どもは、小学生のときからプレゼンができるようになり、羨ましく思っていたのですが、いかに機械を使ったとしても、結局、しゃべるのは人間で、今の映像を見て感じたことは、ある程度ボディラン

ゲージを交えながら話しをしないと、人の心に伝わらないということです。

教師が子どもたちを指導する際は、伝え方の指導もしていただけたらいいのかなと思います。

(神崎教育デジタル改革室長)

資料2ページの「11 その他」の(6)の部分をご覧ください。

指導にあたる教員は、可能な限り「教員のプレゼンテーション指導力向上セミナー」を受講することにしております。ボディランゲージも含めて、発表の仕方、構成の仕方等について、まず、教員をしっかりと研修した上で、子どもたちの指導にあたってもらうようにしておりますので、そこはしっかりとやっていきたいと思っております。

(高橋委員)

豊後高田市の学校の授業を見ているときですが、1人の生徒の「iPad」だけ、画面がフリーズしたのです。その生徒を置いてけぼりにして、全体の授業を進めようとしており、そこが気になりました。後で、違う「iPad」に替えていましたが、臨機応変というか、突発的に何かがあった場合に、すぐ対応できるようなスキルを身に付けさせないと、やっぱり機械に使われてしまうというような感じがしました。このようなことが常態化してしまうと、いかがなものかと思っておりましたので、指導を強化していただきたいです。

(米持教育次長)

鈴木委員からのご発言に対する補足ですが、昨年、「全国学力・学習状況調査」については、実施がありませんでしたが、県調査の中の意識調査ではっきりしたことで、中学生になっても半分くらいの子どものしか自分で学習計画を立てて勉強することができないということがありました。つまり、教員の対面指導ができなくなったときに、自分で考えられない子どもが顕著になったということです。特に小学生において、教員が一つ一つ指示をしないと何もできないということがあり、そのあたりは基本的に考え直して、日常からそれを意識して小・中学校を指導しているところです。

加えて、作文や絵の指導に関して、指導力のある教員は、このようにすればコンテストに通りやすいとかのコツを教えられます。このことは、悪い面があって、そのコツの通り当てはめていくことで、実際にコンテストを通過してしまう。それが果たしていいのかどうか。そこをしっかりと議論して、子どもたちには、その先の社会で役に立つような、しっかりとした力を身に付けさせなければならないということを含めて指導したいと思っております。

(林委員)

プレゼンコンテストの応募条件の中に、「著作権や肖像権等の侵害等に留意し」ということの記載があります。このあたりの指導をどうするかということもあり

ますが、アイデアも含めてオリジナルである事が大事だという教育はしているのでしょうか。オリジナリティが大事だということはどう担保しているのでしょうか。

(神崎教育デジタル改革室長)

林委員がおっしゃられたことも含めて、教員に対するプレゼンテーション指導力向上の研修の中でしっかり指導したいと思います。

(林委員)

私たちは、そのような教育を受けていないので非常に苦勞をしています。大学生でも、誤ってインターネットの情報から引っ張ってきたりしてしまいます。小さい頃から、自分のオリジナルのものを作るということを評価してあげるべきだと思います。

② 大分県 STEAM 教育（次世代人材育成）推進事業について

(2 課〔教育改革・企画課、高校教育課〕入室)

(岡本教育長)

次に、報告第 2 号「大分県 STEAM 教育（次世代人材育成）推進事業について」高校教育課長から説明をしてください。

(三浦高校教育課長)

それでは、「大分県 STEAM 教育（次世代人材育成）推進事業について」説明します。

資料をご覧ください。

この事業によりまして、SDGs に目標とされるような諸問題の発見から解決ができる人材、また、先端科学技術分野で幅広く活躍できる人材を育成するため、思考力・想像力を育成する STEAM 教育の推進を図ります。

STEAM 教育を推進するにあたり、今年度はテーマとして「宇宙」をあげております。

今年度、ISTS の開催や、今後のスペースポート開港を前に、大分県では宇宙への機運が高まっており、また「宇宙」というテーマは、分野横断的な学びである STEAM 教育の教材として相性がよく、適していると考えています。

事業の概要ですが、活動の軸は 3 つあります。

1 つ目は、多くの高校生に参加してもらい、講座・講演会や体験型ワークショップを通して、STEAM 教育についての理解を深めてもらうイベントです。

2 つ目は、各 50 名程度の生徒による、半年間かけておこなう課題研究特別講座です。「宇宙の食と暮らし」をテーマに、県内の企業や大分大学、東京学芸大

学、その他専門機関に協力をいただき、高校生が課題の発見から解決までを体験します。その成果は、シンポジウムで発表するとともに、ISTSに関連する事業の中でも発表が予定されています。

3つ目は、教員を対象とした理数探究実践オンライン講座です。参加する教員は、経産省のSTEAMライブラリーの活用方法に係る講座やSTEAM教育を学ぶEラーニング、専門家とのディスカッションを通して、それによって得た学びをもとに、チームに分かれて授業を考案し、その後、実践をしてもらいます。

この取組によって、各教科の授業や総合的な探究の時間、来年度からの理数探究、理数探究基礎で実践できるような授業を、専門家の支援のもとで、県内多くの教員が協力して作り上げることができます。

次に、チラシをご覧ください。

7月22日に実施される「STEAM FESTA」の案内で、この行事に、高校生194名が参加します。

「STEAM FESTA」では、講演会やトークセッションだけでなく、JAXAや沖縄科学技術大学院大学の専門家によるワークショップを通して、学ぶことや探究活動の楽しさを改めて高校生に体験してもらいます。裏面に当日の内容を掲載しております。

このように多くの高校生が参加する行事としては、今回の「STEAM FESTA」、9月と12月に予定されているオンライン講演会、2月に予定されているシンポジウムがあります。なお、2月の宇宙と科学の高校生シンポジウムは本事業を総括するものであり、生徒の活動の発表などを行います。

また、今回、大変残念ではありますが、来週から、東京都に緊急事態宣言が出されるということで、「STEAM FESTA」の講演会やワークショップの講師の先生方が東京や沖縄からの移動が困難となり、JAXAの職員についても、このような状況では派遣することができないと判断される可能性が高いことから、今回は、オンラインでの開催とすることにしました。

以上で報告を終わります。

(岡本教育長)

ご質問・ご意見はありませんか。

(林委員)

とても素晴らしい取組であり、特に宇宙のことをやっという事で興味深く、今の高校生、中学生を羨ましく思います。

ただ、なぜ大分で宇宙なのか、宇宙港なのかというところが、見えないというか、わかりにくいと思います。例えば、大分県には、歴史的な人、三浦梅園や麻田剛立などの優れた哲学者、研究者、天文学者が江戸時代にいました。最先端のところで学ばないとそういった研究者になれないのではなく、大分県にいても自分の思考を働かせ、情報を集めることで素晴らしい研究者になれるベースが大分県にはあるということを感じさせるような取組があるとよいのではないでしょう

か。

(三浦高校教育課長)

大変よいご指摘をいただき、ありがとうございます。なぜ大分県なのかということも含めて、高校生や小・中学生に、是非、学習をしていただきたいと思います。

(林委員)

例えば、宇宙のことを深く考える場面で、三浦梅園がいたということをアピールできませんか。三浦梅園が素粒子物理学の源流になっています。湯川秀樹が、三浦梅園の旧宅をよく訪れていたようです。影響を受けた人が多くいるはずですよ。

(三浦高校教育課長)

ありがとうございます。参考にさせていただきます。

(高橋委員)

国東市と九州大学都市研究センターが SDGs に関する包括連携協定を結んだこととの関連も生かせるのでしょうか。

(三浦高校教育課長)

いろいろな要素を入れながら学習を進めたいと考えていますので、活用できるものはできるだけ入れてやっていきたいと思えます。

(高橋委員)

林委員のご発言にあったように、大分県には、優れた研究者がいたということも含め、大分県との関連性を持たせ、大分県でこの取組をやっていく価値について生徒に教えてほしいと思えます。

(岩武委員)

今回の STEAM 教育の中で宇宙というテーマは、おそらく、スペースポートとの関連から設定したのではないかと思えますが、子どもたちは、そもそも宇宙について、これまで深く考えたことがないと思えます。自分のこととして、身近なところから積み上げていく努力をしないと、色々な講話などの耳から聞いたことだけで課題研究をさせても、そもそも課題研究としての意味がないと思えます。

自分の身近な、自分が生活している中から、何を自分が課題と感ずるのか、何を解決したいと感ずるのかということが、STEAM 教育で一番大切なところだと考えます。そうではなく、最初からテーマありきで、そこに強引に持っていかようとしているのであれば、子どもたちの力の育成にはつながらないのではないかと思えます。

花火を打ち上げた（事業を立ち上げた）はいいけれど、実際に終わってみたら

子どもたちにとって何だったのかということになるかもしれないと思います。子どもたちが自分のこととして課題を考え、自分の力の育成につながるような課題研究をやっていただきたいと思います。そのためには、色々なしかけの方法が必要かと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(三浦高校教育課長)

岩武委員のご指摘のとおり、宇宙をテーマとして進めていきますが、世界的なSDGsの問題や生徒たちの身のまわりの課題、これらを自ら発見できるような研究にしていくということは非常に重要だと考えます。あわせて、教員にもオンライン講座等で様々な触発をして、日頃の授業の中で、どういった授業ができるのか、課題解決型の授業が仕組めるのか、そのようなことも研修を通して作り上げていきたいと考えております。ありがとうございます。

(高橋委員)

もう一つお願いしたいことがあります。HACCP基準という食品管理基準もNASAから生まれました。なぜかというと、宇宙船の中で下痢をして食中毒になると船内全てに蔓延するので、そういった厳しい基準ができたようです。生徒たちに、目の前にあるものが宇宙開発から生まれたという関連性を教え、目の前のものでわかりやすく説明した方がいいかと思っております。

あと、日本文理大学にJAXAの関係の展示がたくさんあるので、もし借りられるものがあったら、実際に見てもらった方がいいと思います。

(鈴木委員)

自分の子どもに、主演の俳優が宇宙に取り残されてしまう映画を見せたら、すごく興味をもちました。その映画は、宇宙空間でどう暮らしていくのかとか、自分で生き残るためにどうしていくのかなど、本当に課題解決につながるような取組を宇宙空間で行うというものでした。そのような飛び抜けた発想をしていかないと、何のためにこの勉強をするのかということにつながらないと思います。

9月に小学校の遠足で大分空港に行くようで、それもきっとスペースポートのことがあって行くのではないかと思います。まだ、子どもも先生もよくわかっていないようでした。

大分県でこれだけすごいことに取り組んでいるという理解が、いまいち県民全体には広がっておらず、世の中が新型コロナウイルスで苦しんでいるのに、何がスペースポートだというような風潮も若干あるように思います。

力を入れていることや、採択された大分県の特色や地域性など、魅力ある大分県であること、それがわからないで宇宙や世界とかとつながっても、何となく教育につながらないように思います。もう少し理解を深めるような取組が必要ではないでしょうか。

当日に、初めて学習をするのでは理解が深まらないと思いますので、少し前段

で調べておくとか、事前の授業をしておくのがいいのかなと思います。

あと、話しは変わりますが、県教育委員会のホームページには、色々な資料が掲載されていますが、アカウントを持っていないと見られないものもあり、もっと開かれたものにしてもいいのかなと思っています。教職員を目指す方や高校生など、興味があれば誰でも資料を見られるようにできないでしょうか。検索したらすぐに見つけることはできますが、アカウントがなければ、その先を開くことができないので、そこは改善できないのかなと思います。

(重親教育改革・企画課長)

戻って調べてみて、なぜそのようにしているかを確認します。ご指摘、ありがとうございます。

(三浦高校教育課長)

色々ご指摘、ありがとうございました。生徒たちの学びの中で宇宙をテーマにするのですが、身近なことやなぜ大分県で取組をするのかということ、歴史的なことまで触れながら、1年間かけて研究をさせて、こういった経験をした生徒たちがスペースポートから発射されるロケットを見て、そこで感動が2倍、3倍になるようにしたいと考えておりますので、ご支援いただけたらと思います。

(岡本教育長)

最後にその他、何かありますか。

それでは、これで令和3年度第7回教育委員会会議を閉会します。ありがとうございました。